

「イラストでみる外科手術の ベース & テクニック」

旭川医科大学教授・外科 水 戸 迪 郎 訳
岩見沢市立総合病院部長・外科 大 平 整 爾

鹿児島大学教授
島 津 久 明

大学における外科学の系統講義は、ほかの基礎あるいは臨床科目の場合と同様に、総論と各論に分けて行われるのが通例である。まず総論から始まり、次いで各論に移る。総論の内容は各論全般に共通した基礎的事項に関するもので、その基本的な重要性は申すまでもないが、残念ながら総論を学ぶ時点では、その各論における重要性がまだよく認識されないために、十分な関心が払われないまま終わってしまうことが多いのが実情である。こうした事情が現実には外科臨床に携わるようになる場面まで持ち越されるため、日常、習慣的に行っている診療行為の基礎的背景について十分な思考をめぐらすことなくやり過ごしてしまっていることが少なくないように思われる。各論をひと通り終了したのちにも、事あるたびに総論に立ち帰って、各論における個々の事象や行為の理論的裏づけを絶えず追求する精神を持

つことが極めて重要である。しかし、総論に関する従来の成書の記述は一般に退屈で、抽象的、難解な表現に終始する傾向が少なくなく、そのため、いささか取っつき難い印象を与えていることは否定できない。

こうした状況において、最近、旭川医科大学外科の水戸迪郎教授と岩見沢市立病院外科の大平整爾部長によって翻訳されたメルボルン大学外科の Freidin 助教授と Marshall 教授による「イラストでみる外科手術のベース & テクニック」は、大変時宜を得た好著と言えるものである。この本は、1. 創傷—その治療過程と処置法、2. 外科的操作の原理、3. 手術の準備、4. 手術、5. 術後の正常な経過、6. 術後合併症、7. 日常よく行う手術、の7章から成っており、これらの各章のタイトルからも知られるように、外科手術の実施に関する基礎的事項が最新の知見を含めて的確かつ簡潔に述べられて

いる。各章におけるいろいろな項目の取り上げ方も非常に垢抜けている。第3～5章では、患者・家族・紹介医などへの対応の仕方についても、最近の社会情勢を踏まえた適切な提言があり、その内容は国情の相違を超越して十分に耳を傾けるべきものである。

そして本書のもう1つの大きな特徴は、その標題からも明らかなように、記述を明解にする手助けとして非常に多くの図が提示されている点である。一般に欧米の成書では図表が添付されることが少ないが、その点、本書は異色のものである。それぞれの図は模式化された簡単なもので、写実性に欠けているが、それが読者に要点を的確に伝えるうえで、むしろより大きな効果を発揮する好結果を招いている。図が適切に描かれているためである。視覚を通じる情報伝達形式が愛好される現代によくマッチした本とも言えるものである。

本書の原題は“*Illustrated Guide to Surgical Practice*”であるが、上記のこの訳語もなかなか洒落れている。本文の訳文も読みやすい。病棟の主治医として活躍する研修医や若い外科医諸兄にぜひご一読をお薦めする次第である。

B5判 244頁 図414 1987

¥ 4,000 円 300

医学書院 刊